

清代八股文における八股（提股・出題・ 中股・後股）と收股について（7）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg,
Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (7)

滝野 邦雄
Takino, Kunio

（3）解法と用例

陝西安康の張鵬翮の『新增花様集錦』（道光二十一年〔一八四一〕刊）には、八股それぞれの箇所についての解法が説明され、その用例が紹介されている。拙稿では、張鵬翮の説明する解法はどのようなものかを考えた後に、それぞれの解法として引用される例文を検討してみたい。

①提股

（i）提比襯跌醒目法（際立たせ展開し目を醒ませる法）

跌（『斯文規範』卷之六に「跌は足 據を失うなり」）の云う者は、乃ち本股中の上文の小小にして頓斷（ひっぱって断つ）する處より、隨いて轉筆^①を用う。即ち世の所謂ゆる挺接（取り出す）して陡（急に）に轉する者なり。蓋し跌せざれば則ち一直に説き下り去き、文氣 倒塌（倒壊する）し振るわず、便ち筋に着し骨に着し、以て題の堅を透^{とお}り、以て文の色を莊にする能わず。其の必ず襯^②（際立たせる）を用いる者は、蓋し曲^③・拆^④に取る。活動（躍動）すれば、則ち跌宕（文章に変化を富ませる）以て勢を蓄え、摩挲（彫琢する）以て生姿（優れた文とする）す。閱者をして、神昏じ目眊

なるの時に於いて、忽ち時花（旬の花）・美女に遇いて倦むが眼 頓にして之が爲に醒むが如くするなり。此れ又た股中の生死の關なり。故に前後各股の中に分布す。願わくは志有る者交ごも之を撫せんことを（『新增花樣集錦』卷二・廿一葉・「提比襯跌醒目法」条）。

①轉：『斯文規範』に「凡そ水の行くは必ず轉折有り。方に曲水の流長の妙を見れば、則ち之を文に通づ。凡そ文中の正意 已に盡くれば、必ず更に一層を起こし轉折す。方に曲がりて致す有るは、水の轉折して曲水の流長の妙を見ると相い似たり。故に之に名づけて「轉」と曰う。其の又た更に轉一灣するを言うなり」（『斯文規範』卷之七・八葉・「一曰轉」条）。

②『初學題類』下卷に「襯とは、彼の物を以て此の物を襯するなり。題に日月を説けば、星辰の類を以て襯を作る。題に河海月を説けば、江淮の類を以て襯を作る……」。

③曲：『夢雲軒管見録』に「天上に文曲星有りて、文直星無し。故に詞 巧みならんと欲すを曰う。巧みとは即ち曲の謂なり。山に峰巒無ければ、則ち峨嵋 秀を失う。水 波瀾無ければ、則ち散漫平直なり。毫も生趣無し。何の觀作に足ること有らん。文も亦た然り。若し直頭布袋なれば、何の文理を成さん」（『夢雲軒管見録』卷七・制藝總論・四葉・「曲」条）。

④跌宕：『斯文規範』に「跌は足 據を失うなり。宕とは放宕なり。兩字合わせて看る。總するに是れ我を以て題を制し、題の正面に困しむ所と爲らず。後、復た開筆を作り以て後文の勢を展するなり。文字 實發の後、必ず更に此の文情を具え、方に生動を得。唐翼修（唐彪） 謂えらく「文章 既に情理を得れば、必ず兼ねて跌宕有り。然る後に神情 摇曳し、姿態 横生す。然るを期せずして、閱者 心喜ぶ」（『讀書作文譜』卷之七・三葉・「跌宕」条）と。正に此れを謂うのみ」（『斯文規範』卷之六・二十葉～二十一葉・「一曰跌宕」条）。

文の最初の部分の少し屈折させたところを展開させて文を作る方法である。もしも、この方法を取らなければ、文は一気に流れてしまい、文の勢いは削がれてしまつて振るわない。そして、屈折させたり分析したりして、襯（際立たせる）するのである。躍動させれば、文に変化して勢いが加わり、彫琢して優れたものとなる。そうなれば、読者の気持ちがぼんやりしている時に、旬の花や美女に出くわして疲れた眼がはつきりするようになる。これが、八股の箇所の

決め手になるところである。

[用例]

題目：鼻之於臭也（『孟子』盡心下）

口運於實，耳目運於虛，鼻則參虛實之間，體常靜而用常動，呼吸互爲往來，而視其栩栩若獨具乾坤闢闔之機，

目主於施，口耳主於受，鼻則兼施受之妙，吐其故而納其新，屈伸互爲摩盪，而息之深深要不外陰陽消長之理（『新增花樣集錦』卷二・廿二葉・「提比襯跌醒目法」条）。

（口は實を運び，耳目は虚を運ぶ，鼻は則ち虚・實の間を参じ，體常に靜にして，用は常に動く。呼吸 互いに往來^①を爲し，而して其の栩栩（動くさま）を視るに獨り乾坤闢闔の機を具うるが若し。

目は施こすを主とし，口耳は受くるを主とす，鼻は則ち施・受の妙を兼ね，其の故を吐きて，其の新きを納む。屈伸 互いに摩盪^②を爲し，而して息の深深^③の要は陰陽消長の理に外ならず）

①往來：『易』繫辭傳上に「是の故に戸を闢^{とぎ}す 之れ坤と謂い，戸を闢^{ひら}く 之れ乾と謂い，一闢一闢 之れ變と謂う，往來の不窮まらざる 之れ謂之と謂う」。

②摩盪：『易』繫辭傳上に「是の故に剛柔 相い摩し，八卦 相い盪^{うご}く」。

③息之深深：『莊子』大宗師に「古の真人は、其の寝ぬるや夢みず、其の覺むるや憂いなし。其の食うや甘しとせず、其の息するや深深たり……」。

(ii) 提比兩路夾寫法（ふたつの方面からはさみこんで書く方法）

王巳山（王步青：字は罕皆，號は巳山。江蘇金壇の人。清・康熙十一年（一六七二）～乾隆十六年（一七五一）。雍正元年癸卯恩科（一七二三）三甲八十六名の進士）曰く，^マ熟（塾）師 子弟に教ふるに，合掌の病 除かずして其の通を求めんと欲するは，是れ猶お絶流斷港に航して海に至らんと欲するがごときなり^①，と。梁省吾 曰く，對比^{じづら} 字面を改換（変換）

するも、意義 甚だしくは分別する無ければ、最も誤りを後學に遺すに足る（『墨選觀止』例言・二葉）と。諸君子の言を觀るに、文を爲すは獨り分股に在るを知る可し。試みに名家の文を觀るに、長短股を論ずる無く、均しく是れ兩箇の意思あり。愚 謂えらく、兩比の分柱^② 其の例最も多し。而して兩路夾寫^③より妙なるは莫し。或いは一前一後、一上一下、一高一卑、一古一今の類、必ず是れ劃然（はっきり）と兩つとも擷（ぴんと立てる）す。此の習慣に従い、自然と任憑（自由に）にして恁地（このように）文を拈すれば、其の分股の處、總じて皆な犂然（はっきり）として混ぜず……（『新增花樣集錦』卷二・廿四葉・「提比兩路夾寫法」条）。

①韓愈「送王秀才序」に「猶お斷港絶潢^{ㄊㄨㄤˋ}に航して、以て海に至らんことを望むがごとし（出口のない入り江や切りきなされた池を航行して、海に行きつこうと望む）」。

②分柱：『斯文規範』に「梁素治 曰く、分股立柱。蓋し股首に於いて一意を創り、一股の綱領と爲すものなり。其の法 亦た一ならず。題意より分柱する者有り。理學題の「致知」・「力行」を用いて分柱する、仕進題の「致君」・「澤民」を用いて分柱するが如きは是れなり。題面より分柱する者有り。「主忠信」（『論語』學而・子罕）題の「忠」・「信」を以て分柱する、「致中和」（『中庸』第一章・第五節）題の「中」・「和」を以て分柱するが如きは是れなり。註語より分柱する者有り。「夫何爲哉」（『論語』衛靈公）題の「紹堯」・「得人」を以て分柱する、「至道不疑^{ㄊㄨㄥˋ}（疑）焉」（『中庸』第二十七章第五節）題の「聚字」・「成字」を以て分柱するが如きは是れなり。上文を承けて分柱する者有り。「奚取於三家之堂」（『論語』八佾）題の「天子」・「辟公」を以て分柱する、「是謀非吾所能及也」（『孟子』梁惠王下）題の「事齊」・「事楚」を以て分柱するが如きは是れなり」（『斯文規範』卷之三・十六葉・「一日分柱」）。

③兩路夾議：『斯文規範』に「其の題面を敘するを言うなり。題中の兩三箇の要緊（重要）の字に靠住し、一番の議論を立て、以て下文と對針す」（『斯文規範』卷之四・十一葉・「一日夾敘夾議」条）。また、『斯文規範』に「題の虛字が中間に在れば、先ず兩頭の實字より説き起こし、以て中間の虛字を夾み寫^{ㄎㄚ}くを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十三葉・「一日順逆夾寫」条）。

王步青がいうように合掌（二股が同じような語句を用いて文章を展開する）の弊害を考慮しないで、八股文を究められない。また、梁省吾は、『墨選觀止』で、

字面を換えただけで、その意味がはっきりと分けられていないと、後世に誤りを遺すだけだという。名人たちの発言を見ても、対句の立て方に重点が置かれている。私は、そのなかでも兩路夾寫（ふたつの方面からはさんで書く）法がすぐれていると思う。

[用例]

題目：誠不以富，亦祇以異，其斯之謂與 三句（『論語』顔淵）

謂是顯榮福澤即爲禍伏，此猶矯激之說，安在軒冕之内，悉庸夫特恐碌碌無所短長，君子笑其挾持無具矣，

謂是貧賤憂戚玉汝於成，此猶慰藉之談，安在窮餓之中，皆奇士苟其卓卓有以自立，君子信其表見不虛矣（『新增花樣集錦』卷二・廿六葉・「提比兩路夾寫法」条）。

（是れ顯榮福澤は即ち禍の伏すと爲すと謂うは、此れ猶お矯激（奇異偏激）の説なるがごとし、安くんぞ軒冕の内に在りて、悉く庸夫 特に碌碌として短長（すぐれたところ）とする所無きを恐れん、君子 其の挾持の具うる無きを笑う。

是れ貧賤憂戚は汝を成るに玉にすと謂うは、此れ猶お慰藉の談なるがごとし、安くんぞ窮餓の中に在りて、皆な奇士 苟に其れ卓卓として以て自立すること有らん、君子 其の表見の虚ならざるを信ず^②）

①張載『西銘』に「富貴福澤は、將に吾の生を厚くせんとするなり。貧賤憂戚は、庸^もつて女^{なんじ}を成るに玉にするなり」

②『史記』五帝本紀贊に「其の表見する所は皆な虚ならず」。

(iii) 提比連環鎗法（鎗を連ねて書く方法）

前輩の文を論じて、峯・鋒・風の三字訣有り。此れ専ら用筆を指して之を言う。其の所謂ゆる峯なる者は、每股の起筆 突兀（際立つ）なること雲

峯の轟起するが如きを言う。能く股頭をして勢い有らしめば、則ち通比皆な振るう。愚 毎に名家の文暨および墨卷の内を見るに、其の股頭の起句連環鎗（連なった鎗）法を用い、能く倦眼麻茶（見るのに疲れてぼんやりする）中の精神をして之が一振を爲さしむ。此れ作者の精神 之が鼓動（奮い立つ）を爲すなり。乃ち及門（学生）の文を爲す者、往往にして此の處 勢いを少く。因りて數十則を集め、各股の内に分布し、病に因りて藥を用いて、之が懦を振るい靡を起こすを爲さしむ、しかい云う（『新增花様集錦』卷二・廿八葉・「提比連環鎗法」条）。

股の最初の部分を際立たせる方法である。最初の部分に勢いをあたえたならば、全体が躍動する。私（張鵬翮）のみるところ、名人は股の最初の部分に連環鎗（連なった鎗）法を用いて、はっとさせている。しかし、一般の人たちは、ここのところの勢いが無い。

[用例]

題目：論篤是與 二節（『論語』先進）

道德仁義之説、眞士以之立品、僞士亦以之沽名、則性情心術在君子、自別有表見之地、而求之齒牙之緒論、則已疎、

孝悌忠信之談、大儒矢其悃忱、小儒亦行其意氣、則見微知著在君子、原不憚刻覈之嚴、而信之議論之樸誠、則太淺（『新增花様集錦』卷二・三十二葉・「提比連環鎗法」条）。

（道德仁義の説、眞士は之を以て立品し、僞士は亦た之を以て名を沽る、則ち性情心術は君子に在り、自から別に表見の地有りて、之を齒牙の緒論に求むるは、則ち已に疎し。

孝悌忠信の談、大儒は其の悃忱（ちか至誠）を矢い、小儒は亦た其の意氣（意気込み）を行なう、則ち微かなるを見て著わるるを知る（物事の兆しを見て、その顛末を知る：『韓非子』説林上に基づく）は君子に在り、原とより刻覈の嚴を憚らずして、之を議論の樸誠に信ずるは、則ち太はだ淺し）

(iv) 提比雌雄角勝法（雌雄を決して書く方法）

趙石伯 曰く「舉業の要祕は、刻露（完全にあらわして描写する）の二字に過ぎるは無し。刻して露わさざれば、淺人をして解を得しむる能わず。露わして刻せざれば、深人をして刮目せしむる能わず。既に刻し既に露し、深淺 咸な宜し。其れ百發百中なるか」と（『舉業要言』卷之二・八葉）。愚 謂えらく此の訣 今日の雌雄角勝法より過ぎるは無し。梁省吾^①の論文 極めて精なり。然れども諦觀（『墨選觀止』）の選ぶ所、率むね每比中の奇偶の字を拵りて旋轉挑別（轉換して指摘する）し以て勝ちを取る者なり……（『新增花樣集錦』卷二・二十二葉・「提比雌雄角勝法」条）。

①梁省吾は、『墨選觀止』（道光十二年（一八三二）序）の編者。

趙石伯は、完全にあらわして描写することが秘訣であるという。描写しても内に秘めた道理を言い尽くさないと、一般の人はわからない。内に秘めた道理を言っても描写して書かないと、達人は注目してくれない。完全にあらわして描写できれば、完璧となる、というのである。私は、この秘訣を行なうには、雌雄角勝法がよいと思う。梁省吾は、『墨選觀止』でくわしく例文をあげているが、その選んでいるのは、対句の文字の轉換に工夫を凝らそうとしたものである。

[用例]

題目：仁者先難而後獲（『論語』雍也）

蓋仁之事有操無舍，而此自謂能操之念，即爲舍所自伏而操不終操，蓋其志已浮也，

仁之功以克爲復，而此自謂易復之心，即其克有未堅而復難終復，蓋其神先操也（『新增花樣集錦』卷二・三十四葉・「提比雌雄角勝法」条）。

（蓋し仁の事は操る有りて舍つる無し、此れ自から操るを能くするの念と謂う、即ち自から伏する所を捨てると爲し、操るは操るに終わらず、蓋し

其の志 己に浮むなしければなり。

仁の功は克つを以て復と爲し、此れ自から復し易きの心と謂う、即ち其の未だ堅からざるに克ち、復は復に終わり難し、蓋し其の神 操るを先にすればなり)

①克：題目の条の朱注に「程子 曰く、難きを先にするは、克己なり。難き所を以て先と爲し、獲る所を計らざるは、仁なり」。また、『論語』顔淵に「顔淵 仁を問う。子 曰く、己に克ちて禮に復するを仁と爲す、一日 己に克ちて禮に復すれば、天下 仁に歸す。仁を爲すは己に由る。人に由らんや、と……」。

(v) 提比譬喩新穎法^① (たとえを用いて新鮮な趣向として書く方法)

杜工部(杜甫) 云う、衆人 苟も得るを貴ぶも、[自分は] 語らんと欲して雷同を差つ(『前出塞詩』第九首)、と。蓋し誠に「人 云う」・「亦た云う」を見れば、則ち閱者 「顧みずして唾す」(『春秋左氏傳』僖公三十三年)、と。誠に千萬の貔貅ひきゅう(勇猛な戦士)の中に於いて、幟を抜きて先ず登らん(勝ちを制するために先に行なう)と欲するなり。此れ秕糠(もみとぬか：価値のないものの喩)を掃却するに非ざれば、新穎(新鮮な趣向)を獨り標する能わざるなり。困りて近科の中の正面より説きて透徹(徹底)ならざれば、必ず喩の義を用いて以て之に達する者を集め、以て及門(学生)の爲の嚮導(道案内)と作す、云う(『新增花樣集錦』卷二・三十九葉・「提比譬喩新穎法」条)。

①譬喩：『斯文規範』に「…譬喩は是れ比擬(股中に於いて本題を將つて他の處と比擬するなり〔『斯文規範』卷之三・十九葉・「一日比擬」条])の意なり。猶お這箇畜だ這箇の如きのみならずと言うがごとし。其の中、必ず「譬如」字、或いは「猶」字・「如」字有りて承接す。「如譬北辰」(『論語』爲政)三句・「猶水之就下」(『孟子』告子上)兩句・「如七十子之服孔子也」(『孟子』公孫丑上)一句の如きは、即ち是れなり。……」(康熙五十九年序・王允徳『斯文規範』卷之四・七葉・「一日分論譬喩題作法」条)。

多くの人は、かりにも利益になればよいとして功績を語るが、自分はそうした

人と一緒になるのは恥ずかしいのでいわない、と杜甫は詠う。ほんとうに「人云う」・「亦た云う」などと書いてあれば、採点する人は見もしない。「人云う」・「亦た云う」などと書いて評価してもらおうというのは、勇猛な人たちのなかにおいて、それらの人たちより勇猛でありたいと願うようなものである。したがって「人云う」・「亦た云う」などという時は、ありふれたものを除き去らないと、あたらしい趣向は見いだせない。そこで、正面から説いても徹底できないために、比喩を用いてすばらしい文となっているものを以下で集めて、道案内とする。

[用例]

題目：子謂子賤 一章（『論語』公冶長）

若人年最少如良玉，然太璞在抱，方懼無以發其光，而不謂追琢，而質有其美，已極之溫潤縝栗而莫女瑕疵，也則席上之珍矣，

若人仕最早如製錦，然操刀思割，方虞無以和其器，而不謂摩厲，而硯發於新，已居然得心應手之莫予貽羞，也則華國之才矣（『新增花樣集錦』卷二・三十九葉～四十葉・「提比譬喩新穎法」条）。

（若のごときの人，年は最少にして良玉の如し，然れども太璞の抱くに在りて，方に以て其の光を發する無きを懼る，而して追琢（玉に彫刻すること）を謂わず，而して質に其の美有りて已に之を極む，溫潤（品性が溫和柔潤）縝栗（細緻堅實）にして女に瑕疵莫し，也た則ち席上の珍なり。

若のごときの人，仕うることも最早く製錦（賢者が地方官に任命されること：『左傳』襄公三十一年に基づく）の如し，然れども操刀思割（政事にうとく，官吏に任命されても必ず失敗する），方に以て其の器に和する無きを慮る，而して摩厲と謂わず，而して硯^{といし}新しきを發す，已に居然として之に得心應手（多才：『莊子』天道に基づく）し，予に貽羞（恥を受ける）する莫し，也た則ち華國の才なり）

(vi) 提比三爆入營法 (三度砲撃して營に入るように書く方法)

韓昌黎 (韓愈) 曰く「空に横たわって硬語を盤^{はん}し、妥貼 (平易で隠当) して力 冪^こを排す」(「薦士」), と。蘇東坡 (蘇軾) の「與侄書 (與侄帖)」に曰く, 少年の文字 須く氣象をして崢嶸 (突出) せしむ, と。⁽¹⁾ 謝疊山 (宋・謝枋得) 曰く, 氣力 雄健にして光燄 長遠なり。之を読み, 人をして意 強く, 而して神 爽ならしむ, と (謝枋得編『文章軌範』卷二・「放膽文」卷頭言)。至れるかな斯の言。千古行文の妙 之に盡く。近ごろの數科の提比の中, 三疊句を創り爲して之を三爆入營と謂い, 四疊句もて之を駟馬擺隊 (四頭だての馬を並べる) と謂う。此れ周秦兩漢の文に往往にして之を見る者なり。之を時文に用いれば, 宜しく其の文に壇^{ママ} (擅) に捷を報すべきなり。茅鹿門 (明・茅坤) 曰く, 「世の名家 經史に深し, 其の胸中の見る所は, 既に超たり。鏗の聲と爲り, 布の藻と爲る。迴かに人と別あり」, と。故に疊山 (謝枋得) 古文の場屋に益有る者を取りて其の字句を標し, 之を法として甚だ精, 甚だ簡なる者なり。承學の士をして之に倣わしめば, 皆な文に雄となる。論者 此の調べに詳しからずして, 之を經史に得れば, 輒ち以て硬砌 (堅く並べたてる) にして之に薄し。而れども文衡を主たる者, 仍お之を少しく異ならずとして取る。蓋し經史を以て句を併せて此れに似せる者は, 枚舉に勝えず, 故に其の叫囂 (わめき立てる) に任す。作者・取る者 仍お自ら事無き所を行なうなり。人皆な

(1) この語は, 通行の蘇軾の文集にはいまのところ見いだせないが, 「與侄帖」の語として明・清の八股文の解説書によく引用される。明・唐順之の編纂した類書の『稗編』卷七十六・「文章雜論上」には出拠として『[明人] 文斷』をあげている。なお『四庫全書總目提要』によれば, 『[明人] 文斷』は,

撰人の名氏を著わさず。皆な前人の文を論ずるの語を採撰し, 抄録して成る。引く所の「緯文瑣語」・「湖陰殘語」の類の如きは, 今は皆な傳わらず, 頗る考證に資するに足る者なり。然れども舛誤冗襍 亦た複た少なからず…… (『四庫全書總目提要』卷一百九十七・集部五十・詩文評類存目・「明人文斷無卷數」条)。

といわれる。

争いて之に效う。然らば則ち吾の小子に教ふるに、又た何ぞ必ず然らざらんや（『新增花様集錦』巻二・四十葉～四十一葉・「提比三爆入營法」条）。最近の試験では三句（対句の前句と後句とをそれぞれ三句で作る）で形成するのを「三爆入營」といい、四句（対句の前句と後句とをそれぞれ四句で作る）で形成するのを「駟馬擺隊」という。これは、周・秦・兩漢の文に往々みられる形式である。これを八股文に用いたならば、合格するであろう。

[用例]

題目：古之愚也直，今之愚也許而已矣 二句（『論語』陽貨）

勿以雕琢喪其天，勿以穿鑿漓其始，勿以儉險泊其心，已見爲愚，人亦其見爲愚而昭質無虧者，其愚亦若原於賦卑，

勿以矯揉失其眞，勿以計較矜其術，勿以掩者逞其私，人見爲愚，已亦自知爲愚而由中以出者，其愚亦若本於性情（『新增花様集錦』巻二・四十一葉・「提比譬喻新穎法」条）。

（雕琢を以て其の天を喪うこと勿れ，穿鑿を以て其の始を漓（うすくする）こと勿れ，儉險（奸邪險惡）を以て其の心を^と泊めること勿れ，已に愚爲るを見て，人亦た其の愚爲りて昭質の虧くる無き者を見れば，其の愚は亦た賦卑に原づくが若し。

矯揉を以て其の眞を失うこと勿れ，計較（はかりくらべる）を以て其の術を矜ること勿れ，掩者を以て其の私を逞しくすること勿れ，人愚爲るを見て，已に亦た自から愚爲るは中^より以て出ざる者を知れば，其の愚は亦た性情に本づくが若し）

(vii) 提比高立濶行（高所よりし、^{ひろ}濶く行くように書く方法）兼三爆入營法（三度砲撃して營に入るように書く方法）

杜少陵（杜甫）の詩に曰く、「卓立せる天骨，森として開張す（たかくそ

びえた天成の骨格がいかにめしくのびやかにはっている)」「(天育驃圖歌)」、
 と。其の凡馬に異なる所以の者は、力大に神全きを以てなり。題「目」の
 大小を論ずる無く定めて眞の命脈(要点)有り。眼の頂より高きに非ざれ
 ば、知る能わず。力の身より大に非ざれば、運ぶ能わず。故に文に健なる
 者は、高立濶行法有りて、馬の雲に●(一字不明)して、「鶴の雞羣に立ち」
 (『藝文類聚』所引「竹林七賢論」：人の才能が群を抜いていることの譬え)
 て、高渾(高超渾厚)端凝(庄重)もて一切の氣概を函蓋(包含)する有
 るが如し。場屋 此れを辨ずれば、縦え人人 掄元(科挙第一名に選ばれ
 る)なる能わずとも、要するに前茅(成績上位)なる者は是に近きを出で
 ざるなり。愚 二三子の筆の健舉(たくましくて力強い)なる能わざるを
 憫れむ。故に近科の文に於いての搜し得たる數則もて高處の立てば則ち物
 の障つ所と爲らず、濶^{へだ}き處^{ひろ}の行けば則ち題「目」の窘^{くる}しむ所と爲らざるを
 知らしむるなり(『新增花樣集錦』卷二・四十五葉・「提比高立濶行兼三爆
 入營法」条)。

ふつうの馬と名馬との違いは、力を大に神を全うするところである。題目には、
 ほんとうの要点がある。高所から見ないとそれを知ることができない。力が身
 の丈より大きくなければ、運べない。したがって、すぐれた文を書く人は高立
 濶行(高所より^{ひろ}濶く行く)方法で、人よりすぐれるのである。これを理解でき
 れば、首席でなくても、上位で及第できるのである。

[用例]

題目：雖曰未學吾必謂之學矣(『論語』學而)

先王之立學也、學之爲父子、學之爲君臣、更深以敬業樂羣之事、凡所以合
 俊選而廣、其造就者肫肫乎以大學爲教而已、

君子之爲學也、孝子以事其親、忠臣以事其君、更加以尊賢取友之益、凡
 所以範履蹈而成、其德行循循乎以正學爲歸而已(『新增花樣集錦』卷二・
 四十五葉・「提比高立濶行兼三爆入營法」条)。

（先王の學を立つるや、之を學びて父子と爲り、之を學びて君臣と爲り、更に深くするに敬業樂羣^①の事を以てす、凡そ俊選^②を合わせて廣くする所以は、其の造就（成就）する者肫肫乎として大學を以て教えと爲せばなり。君子の學を爲すや、孝子以て其の親に事え、忠臣以て其の君に事え、更に加うるに尊賢取友^④の益を以てす、凡そ履蹈（德行）を範^{のり}として成る所以は、其の德行循循乎として正學を以て歸と爲せばなり）

①敬業樂羣：『禮記』學記に「古の教うる者は……三年に業を敬して羣を楽しむを視る」。

②俊選：『禮記』王制に「王の太子・王子，羣後の太子，卿・大夫・元子の適子，國の俊選，皆な造す」。

③肫肫：『中庸』第三十二章・第二節に「肫肫たり其の仁」。

④尊賢取友：『論語集注』公治長「子謂子賤……」条の朱注に「子賤は蓋し能く賢を尊とび友に取りて以て其の徳を成す者なり」。また、『禮記』學記に「古の教うる者は……七年に學を論じて友を取るを視る」。

⑤循循：『論語』子罕に「夫子 循循然として，善く人を誘う」。朱注に「循循とは，次序有るの貌」。

(viii) 提比錦上添花（美しいものの上に更に美しさを加える）格

東坡（蘇軾）の「與侄書（與侄帖）」に曰く「少年の文字 須く采色（文章の格調）をして絢爛（文が華麗なこと）ならしむべし。汝 只だ我（蘇軾）にして、今の平淡を見る。何ぞ舊時の應舉の文字を把^もって、高下抑揚の龍蛇の如く捉え不住（られない）を看ざるや」と。項水心（項煜）曰く「少き時の作文，最も驚く可き喜ぶ可きの句を愛す。若し三四行を讀みて，人をして踴躍として快を稱せしめざる者は，輒ち再び刪改す」と。此れ即ち[武]叔卿の文訣^①なり。所謂ゆる五色錯綜すれば乃ち華采（文才）を成し，經緯 緒に就けば乃ち條理を成すの者なり。愚 謂えらく文章の設色（色づけ）は枚舉に勝えず，而して近日の錦上添花（美しいものの上に更に美しさを加える）格は則ち尤も講ぜざる可からざる者なり。此れ即ち東坡の

所謂ゆる「絢爛」、水心の所謂ゆる「驚・喜」なり。梁省吾の『墨選觀止』に自ら謂う抉擇（選擇）甚だ精なり^②、と。其の實 細かに按ずるに諸文は大抵每股ごとに數（いくつか）の奇偶の字を選び、回環（めぐって）句を成す者居多なり。彼の贊する所の慧心・慧手・慧舌・慧筆と爲るは慧業の文人（宋書・謝靈運傳）に當るに足る者なり。要は此れに外ならず。然らば則ち時に奉^{したが}いて、尚お以て名を求むる者は、此に之れ従わざれば奚^{いづく}に従わんや。提比の従う可きを知れば、則ち中〔比〕・後〔比〕以て類推す可きなり（『新增花樣集錦』卷二・四十六葉・「提比錦上添花格」条）。

①〔〔武〕叔卿 文訣二十三竅有り〕……一に曰く、采。五色錯綜すれば乃ち華采（文才）を成し、經緯 緒に就けば乃ち條理を成す。此れ文章の由り名づくる所なり。若し金にして色を成る無ければ、銅鍍と奚ぞ殊ならん。玉にして寶氣無ければ、瓦礫と奚ぞ異ならん（道光壬申『墨選觀止』附「舉業要言」卷之一・八葉所引）。

②梁省吾の『墨選觀止序』には、「……余（梁省吾） 曩に選ぶ所の『鄉墨淳實』は決擇 惟れ慎しみ、評註頗る詳し。其の當否 敢て知らずと雖も、然れども予が心は則ち既に盡せり。茲の編（『墨選觀止』）の選 猶お前志のごときなり……」（道光壬申『墨選觀止』・序・三葉）とある。

文章の修飾は枚挙にいとまがない。しかし最近の錦上添花（美しいものの上に更に美しさを加える）方法は言及しないわけにはいかないものである。これが、蘇軾のいう「絢爛」であり、項煜（項水心）のいう「驚・喜」である。梁省吾の『墨選觀止』における選択は、きわめて精確である。しかし、細かく見ると、股のいくつかの特徴のある文字について書かれたものを選ぶことが多い。要点は、これである。

[用例]

題目：博學而篤志，切問而近思 二句（『論語』子張）

耳目見聞之迹，意氣即與以爲憑，其恢之彌廣者學可密而不可，疏其斂之彌深者志可靜而不可動也，

性情互證之間，精神即與之俱奮，其資之愈出者問可疑而亦可，信其研之愈

入者思可淺而亦可深也（『新增花樣集錦』卷二・四十七葉・「提比錦上添花格」条）。

（耳目見聞の迹は、意氣即ち與に以て憑くと爲す、其の恢（ひろい）の彌いよ廣き者は密なる可きを學べば不可なり、其の斂するの彌いよ深き者を疏して、靜なる可きを志して動く可からざるなり。

性情互證の間、精神即ち之と俱に奮い、其の資の愈いよ出ざる者は疑う可きを問いて亦た可なり、其の研するの愈いよ入る者を信じ、淺かる可きを思いて亦た深くす可きなり）

（ix）提股馬上插花（馬上に花を飾る）格

世に謂う、試官の衡文（採点）は馬上に花を看るが如しと。此れ瞥見（チラッと見る）の速やかなるを言うなり。近日の風氣 又た馬上插花格を増す。其の意は馬上に花を挿し以て主司（採点官）の目を奪うを謂うなり。夫れ風氣の十年に一變す。花樣（手法）を學ぶ者 三分を學ぶ可く、必ずしも十分の太はだ深きを學ばずを抵す。愚 其の學の淺き者を擇びて提股に列し、入るの深き者もて後股に列し、二三子の時に臨みて效を酌むに任せん。之を總ずるに場屋の文 必ず雅俗 其れ賞され、斯れ萬選青錢^①と爲す。所謂ゆる古今の異なり無き者なり。歴年 久遠なりと雖も、「硯（硯石^{といし}）より發するが若」（『莊子』養生主）くして、見る者 擊節（賞賛）して快と稱せざるなきなり（『新增花樣集錦』卷二・四十八葉・「提股馬上插花格」条）。

①しばしば合格するの意味。『新唐書』張薦傳による。

採点は、馬上に花を看るが如しといわれるように、瞥見（チラッと見る）の速やかなることを言っている。そこで、最近では、「馬上插花格を増す」といって、馬上に花を挿し以て採点官の目を奪う方法をとっている。しかし、こうしたことは十年で変化してしまう。だから三分目を学んで、深く学ぶ必要はない。私

は、八股文は、必ず雅と俗とで評価され、古今の変化はないと思っている。

[用例]

題目：唯天下至誠爲能盡其性（『中庸』第二十二章）

徳足以冒天下之上，萬物皆得而涵之，舉極誼而推之曰至，則復高莫尚實賅夫至動至頤至精至變之名，

心足以觀天下之通，百感無自而滄之，綜全量而括之曰盡，則充滿無虧早通夫盡意盡變盡利盡神之學（『新增花樣集錦』卷二・四十九葉・「提股馬上插花格」条）。

（徳は以て天下の上を冒^{おお}うに足り、萬物皆な得て之を涵^{うるお}す、極誼を擧げて之を推すを「至」と曰えば、則ち復高にして尚とぶ莫く、實に夫の至動・至頤・至精・至變の名を賅（包括）す。

心は以て天下の通を觀るに足り、百感自からの滄^{みだ}す無し、全量を綜べて之を括するを「盡」と曰えば、則ち充滿して虧くる無く、早に夫の盡意・盡變・盡利・盡神の學に通ず）

（つづく）